

令和元年がまもなく終わります。

文責 学校長



～新年は十二支の始まり「子」の年です～

1 あなたにとっての「伯楽」に出会えましたか？

4月の対面式の日には3学年が一堂に会した場で皆さんに「伯楽」の話をしました。覚えていますか？中国の古い言葉の中に「世に伯楽ありて、しかる後に千里の馬あり。」という言葉があり、どんなに優れた人物でも、その才能を見出す優秀な師（指導者）に出会わなければ、その才能は埋もれて世に出ることはないという話をしました。例えば、「坂本龍馬」にとっての「勝海舟」、「西郷隆盛」にとっての「島津斉彬」のような存在に君たちは出会えたでしょうか。出会えていたとしたら、その出会いを大切に、もしまだ出会えていないとしたら探してください。意外と近くにいらっしゃるかもしれませんよ。見つけられない人は校長室へどうぞいらっしやい。一緒に探すお手伝いをしますよ。

2 受験生・高校生は実は高給(時給8万円)アルバイトって知っていますか？

君たちの高校生活は実は時給8万円のアルバイトに匹敵するという話をします。生涯獲得賃金で言えば中卒と高卒、高卒と大卒でそれぞれ1億円の差が出ると言われていています。言い換えれば、無事に高校を卒業すれば中卒・高校中退フリーターよりも**プラス1億円**、さらに勉強を頑張ると大卒になるとさらに**1億円プラス**されるということです。その差額を3年間の高校生活の授業日数約600日で割ると1日17万円、6コマの授業で割ると1コマ45分で3万円、1時間に換算すると4万円（大卒目指すならその倍の8万円）という計算になります。つまり、高校生活を真面目に取り組むこと、受験生として真面目に大学進学のための勉強に取り組むことはそれぞれ時給4万円、時給8万円のアルバイトをしていることと同じになるということです。1億・2億の宝くじに当たる確率よりもはるかに高い確率で1億・2億が入る可能性のある**高校生活に真剣に地道に直向きに取り組んでみませんか。**

3 今日の一言・・・日野原重明と伊集院静（山口県出身）の言葉です。

○命はなぜ目に見えないか。それは命とは君たちが持っている時間だからなんだよ。死んでしまったら自分で使える時間もなくなってしまう。どうか一度しかない自分の時間、命をどのように使うかしっかり考えながら生きていってほしい。さらに言えば、その命を今度は自分以外の何かのために使うことを学んでほしい。



【解説】2017年に107歳の高齢で亡くなった医師・日野原重明氏の言葉で、100歳を超えても医師として現役を買った生涯に裏付けられた、命を温かく見つめる思いが込められています。

【日野原重明について】日本の医師。聖路加国際病院名誉院長、公益財団法人笹川記念保健協力財団名誉会長。一般財団法人ライフ・プランニング・センター理事長、公益財団法人聖ルカ・ライフサイエンス研究所理事長などを歴任した。1995年に発生したオウム真理教による「地下鉄サリン事件」では、聖路加国際病院を開放する決断を院長として下し、外来患者の診察など通常業務をすべて停止し、83歳の日野原は陣頭指揮を執り、被害者640名の治療に当たった。これができたのは、この3年前に日野原の発案で大災害を見越して廊下、待合室の壁面に酸素配管約2,000本を設置していたことや、広いロビーや礼拝堂を設けていたからである。（参考：「Wikipedia」より）

○二十歳の空はどこにでも飛んでいける。信じるものにおかって飛び出そう。空は快晴だけじゃない。こころまで濡らす雨の日も、うつむき歩く風の日も、雪の日だってある。実はそのつらく苦しい日々が君を強くするんだ。苦境から逃げるな。自分と向き合え。強い精神を培え。そこに人間の真価はある。
○大人って何だ？大人とは、一人できちんと歩き、自分と、自分以外の人にちゃんと目をむけ、いつでも他人に手を差しのべられる力と愛情を持つんだ。



【解説】今日の一冊で紹介している作家・伊集院静氏の言葉です。若者に優しくも強い言葉を送り続けています。彼の作品に野球を題材とした作品が多いのは下記の理由からと思われます。

【伊集院静について】山口県立防府高等学校を経て、立教大学文学部日本文学科を卒業した。当初、立教大学ではなく美術大学に進学するつもりでいたが、当時義兄の高橋明が読売ジャイアンツの野球選手だった影響で高校の夏休みを利用して東京に行った折、長嶋茂雄本人から「野球をするのなら立教に行きなさい」と言われ、その一言で立教大学に進学を決めた。野球部の寮に文学全集を持ち込んで入寮するなど、変わった新入部員として注目の的になった。肘を壊したため野球部は途中で退部した。その著作には野球を題材とした作品が多い。（参考：「Wikipedia」より）

4 今日の一冊・・・今回の一冊は、山口県出身の伊集院静の『受け月』です

永年率いた社会人野球の名門チームからの引退を、自ら育てた後輩に告げられた老監督、亡くなった夫の好きだった野球を始めた息子がベンチで試合を見つめる姿に複雑な思いを抱く若い母親、母と自分を捨てて家を出た父親との再会を躊躇(ためら)う男……。誰にも訪れる切ない瞬間によぎる思いを描いた、直木賞受賞作。(「講談社BOOK倶楽部」より)

伊集院静

受け月



【お薦めの理由】伊集院静が直木賞を受賞した短編小説集です。「夕空晴れて」「切子皿」「冬の鐘」「苺の葉」「ナイスキャッチ」「菓子の家」「受け月」の、7編の小説が収録されています。「夕空晴れて」の主人公は、野球好きの夫を癌で亡くし、自宅で働きながら一人息子の茂を育てる由美。ある時、息子が参加するチームの試合を見に行くと、雑用ばかりやらされ、試合に出してもらえない息子の姿を見ます。簡単にやめない、と息子と約束をしていた由美は、チームの監督と話すことにしますが……。

7話すべてが野球にまつわるストーリーで**野球部の監督・選手にオススメの一冊**です。(参考:「ホンシェルジュ」より)

【作者・伊集院静について】表面「今日の一言」の人物紹介を参照してください。

5 日本全県味めぐり…第36回は山口県です。

山口県のグルメと言えば、「ふく料理」「瓦そば」「笠戸ひらめ寿司」「岩国茶がゆ」を挙げたい。まず「ふく料理」。山口県では「ふぐ」の事を幸せの「福」に縁起をかついで「ふく」とも呼んでいます。刺身、てっさ、雑炊、白子、ひれ酒など様々な形で食されています。安土桃山時代に多くの武士が毒にあたり、以後食用が禁じられていましたが、明治21年に総理大臣の伊藤博文が下関市でふく料理を食した際にその美味しさから食用を許可し、全国的に知られるようになりました。次に、「瓦そば」。瓦そばは山口県下関市豊浦町の郷土料理で、川棚温泉のホテルや旅館を中心に広まっています。西南戦争の際に熊本城を囲む薩摩軍の兵士たちが、野戦の合間に瓦を使って野草、肉などを焼いて食べたという話からヒントを得て開発されたのだそうです。そばとお肉を一緒に炒めたものを、麵つゆにつけて食べるというスタイル。正式にはそばを本当に瓦で焼くのですが、家庭ではホットプレートやフライパンを使い、気軽に食されているのだそうです。紅葉おろしや錦糸玉子を散らせば、彩りも楽しめます。そして、「笠戸ひらめ寿司」。「笠戸ひらめ」は、山口県下松市笠戸島の名産。海流の影響で身がひきしまっており大変美味といわれています。天然ひらめの旬は秋から冬だが、現在は養殖ひらめとして管理の行き届いた環境下で飼育されており、年間を通じてそのおいしさを楽しめます。料理としては、姿づくり、焼きもの、煮もの、からあげ、てんぷら、酢物など様々な料理があります。ひらめはふぐに匹敵する高級魚として知られ、特に「えんがわ」は絶品。コリコリとした歯触りを楽しめ、寿司でいただくと美味。最後に、「岩国茶がゆ」は、関ヶ原の戦の後、当時の岩国藩の経済情勢は苦しく、家臣団を養っていく米の節約をするために始まったと言われています。400年近い岩国の歴史と風土と香りと味の溶け込んだ岩国茶がゆは、番茶独特の味わいが米にしみ込んで何ともいえない風味であっさりとした味が格別です。また、岩国茶がゆを食べると五臓に良いと言われています。(参考:「郷土料理ものがたり」より)



【うに】下関の「うに」が美味しいのは、地形と水の関係だと言われています。舌ざわりが滑らかで磯の香りがぷーんと漂う生うにの他、ご飯の炊き上がる頃合いに生うにと少量の塩を入れて炊き上げた「うに飯」や、珍しい生うにのすき焼きなどが郷土料理として知られています。

【豆史郎】山口の昔からの銘菓に豆四郎という外郎があります。名古屋の外郎とは全く違った味と食感が楽しめます。その中でも、豆四郎さん生外郎「生絹 豆四郎」は生なので日持ちはしませんが、一度食べたら忘れられない上品な甘さと食感のお菓子です。価格は1本110円程度です。



6 保護者の皆様へ・・・22日(日)に野菜の販売会を開催しました。

1年生が「体験学習基礎」の授業の中で育てた「白菜」が収穫できる大きさになり、昨年



に続き、厳木道の駅「風のふるさと館」で販売会を開催しました。当日は生憎の雨となりましたが、販売開始1時間ですべて完売しました。今後も収穫でき次第随時販売しますので、道の駅にお立ち寄りいただき、購入していただければ幸いです。詳細は次号に掲載します。

☆『クリスマスの約束』が2年ぶりに復活。明日25日(水)の深夜24時10分から放送。